

『不眠普及』

綾門優季

○登場人物

男 東雲 女

○本編

一幕

舞台一面に砂が敷き詰められている。

平原ではなく、ところどころに起伏がある。乱雑な砂の描く模様には、人の顔などに錯覚しそうな模様があつてもいいだろう。舞台中央に女が横たわっている。すやすやと安眠している女は突然目を見開いて、「ア・・・ア・・・・」と何かに取りつかれたようなうめき声を漏らす。その様子は、まるでいまわの際にあるかのような、鬼気迫るものがある。やがてそのうめき声も収まるが、先ほどと違つて目は閉かれたままであり、時折まばたきはするものの、眠ろうとしても眠りに就けない様子である。体の姿勢を何度も変えてみるが、やがて諦めたようなため息を漏らして、ぱつり、ぱつりと語り始める。

〈なお、一幕の文中の○で示したセリフは女のセリフではないが、録音した音声を流してもよいし、別の俳優が声だけで参加してもよいし、女の役者が別の役を演じ分けても構わない。〉

「不眠症」

女

1

生活に何の不自由もないのに、ある日まったく眠れなくなつた。ストレスは全くないわけじゃないけど、それならば、職場の上司に訴えにくいぐらいの地味なセクハラをされ続けていた日々のほうが、よっぽどストレスフルだった。彼氏と別れたから？でもあいつにはこつれぼつちも未練なんてなかつた。ここまで冷え切つた愛情でよくもまあだらだらと三年も関係が続いたものだと感心するほどなのだ。不摂生がたたつて？いや、あいつがこの部屋からいなくなつてからというもの、毎日同じ時間に寝起

きするようになつて、同じ時間にご飯を食べるようになつて、生活のサイクルはこれまでの人生のなかでも稀にみる安定感を誇つている。なのにどうして？原因が全く思ひ当たらない。明日になれば眠れるだろうと毎日思つて毎日願つて毎日祈つて、遂に一ヶ月が経つて、こんな機会でもなければ一生調べなかつたし、存在にも気づかなかつたであろう、歩いて五分のところにある心療内科にお手軽に不眠症と診断されて、薬をもらつた。これで眠れない不安ともおさらばだ。いそいそと布団に潜り込んだ：けれど、眠気が強くなつただけで全く眠れなかつた。眠気が強くなつたぶん、むしろいちだんと辛さが増しているぐらいだ。状況は完全に悪化しているとみていいだろう。薬を即刻ゴミ箱に放り込んで、布団に大の字に寝転がつて、わたしは暮らしかたを改めて考える。抜本的な改革が求められている。

2 女

「解決策」

わたしが芸術に関心のないことは、事態をより深刻にした。レイトショーをやっている映画館が少し遠いところにあって、最初のうちはそこで時間を潰していくけれど、映画というものに何の興味もなく、恋人といくのならともかく、一人でいく意味がまるで見いだせないという、残念な事実に気づいただけだった。じゃあこういうのはどうだらう。むりやり好きでもない男を捕まえてきて毎晩SEX。これは一ヶ月ともたなかつた。同じ一人の男では、毎晩というわけにはいかないから、どうしても複数の男と寝ることになる。そのことに気づいた時点できつさと諦めればよかつたのに、踏ん切りが悪いのはわたしの悪い癖だ。小魚じやあるまいし、そんな毎日違う男を捕獲できるわけはない。かといって複数の同じ男と何度も寝ていると、見当違いの勘違いを始める男が現れる。望んでもいなぐちやぐちやな関係に巻き込まれたくない。ましてや妻がいることを隠している男と寝てしまつた日には、涙で顔がびしょびしょの知らない女に職場にまで怒鳴り込まれるという最悪のケースにまで発展してしまつた。それ以来きつぱりやめた。こんなくだらない遊びで命を落としたのはなかつた。ギャンブルのセンスがまるでないことは、一晩でボーナスを全額スッた日に身に染みてわかつた。大富豪だつたらそれでいいかもしけないけれど、あやうく今月分の年金さえ支払えないところだったのだ。年金がもらえる年まで生きていられるかどうかはわからないけれど、眠れないつていうだけで本来の寿命を縮めるのは得策じやない。わたしは唸つた。思いつく解決策は、すべて試してしまつた。

3 女

冴えた目で、寝静まつた街を眺めながら、全人類がわたしと同じ病にかかつてくる

ればいいのにと、心から祈る。全人類が生まれてから死ぬまで眠らない世界。その世界はいま住む世界とどんなに違っているだろう？どんな楽しい出来事も、みんな眠ってしまうから続かない。もし眠る必要がないとしたら、ずっと終わらない祭があるはずだ。祭のあと、というのはいつだって切ないものだ。祭のあとなんて、そんな瞬間、出来るかぎり存在しないほうがいい。永遠に続く祭。恋人たちは抱き合つたまま、夜店はいつまでも賑わって、神輿はどこまでもどこまでも進んでゆく。

4 「電話」

電話が鳴る。拒否する。電話が鳴り続ける。断固として拒否する。延々と電話が鳴り続ける。着信履歴を確認する。毎晩SEXをするためにむりやり捕まえてきた、好きでもない男の一人からだつた。電話嫌いのわたしは、余程のことがない限り電話は取らないことにしているけれど、これは余程のことといつていいだろう。あきらめて電話を取ると、切迫した声で彼は言う。

(眠れないんだ。)

「奇遇ね。わたしも最近ずっと眠れないよ。睡眠薬をたらふく飲んでも眠れないよ。」

(俺もだ。)

「お互いい辛いね。」

(お前のせいだ。)

「すぐに他人のせいにするのね。」

(おまえと寝た日から、眠れないんだ。)

「じゃあ永遠にSEXするっていうのはどう？」

(からかってるのか？俺は本気で怒ってるんだぞ。)

「知ってるけど。」

(事と次第によつてはおまえを殺してやりたいとさえ。)

「殺していいよ。」

(は?・)

「眠れなくて、夜を持て余して、苦痛で苦痛で仕方がないから。殺していいよ。むしろあなたは殺される側じゃなくていいの? 眠れない夜が延々と続くのに。電話じやないから切れないのに。拒否できないのに。ぼんやりとした闇が永遠に続くのに。」

女

唐突に電話は切れる。ぼんやりとした闇が永遠に続いている。

5

「比喩」

電話は鳴りやまない。鳴りやまないどころか日を追うごとに、より苛烈になる。着信拒否をしても、すぐに別の番号から電話がかかってくる。十件に一件ぐらいは仕事がらみの電話で、電源を切ったままにしておくことも出来ない。そして今日、部屋の扉を乱暴に叩く音が朝から響き渡っている。わたしは布団に縛りつけられたように横たわる。嫌なことがあつたとき、部屋に帰るや否やすぐに布団をかぶつて、やすやすや眠って現実から逃げようとしていたあの頃が懐かしい。いまや布団の中は、狭い狭い牢獄と化しているのだ。事態はよりややこしい方向に進んでいるのに、解決どころか、現実逃避する手段さえ残されていない。忌まわしい。なんて忌まわしいんだろう。五感を遮断させてほしい。感覺を麻痺させてほしい。思考回路を放棄させてほしい。わたしの願いは叶いそうにない。眠れないことが苦痛なんじゃない。延々と続く意識が苦痛で仕方がないのだ。次々と浮かんでは消える念が邪魔で邪魔で仕方がないのだ。ずっと障害物競走をしている気分だ。眠れなくなつてから、爽快に走り抜けたことなんて一度もない。誰も障害物を取り除いてくれない。増えていく一方だ。最早わたしの頭の中は夢の島だ。いつそ目の前のゴミというゴミに片つ端から火をつけていきたいほどだ。この話が比喩じやなかつたら、とつくの昔に火をつけているだろう。残念ながら、これは比喩だ。火をつけたところで、目の前のゴミは炎上しない。そもそも、鳴り続ける電話と、扉を叩き続ける男が表にひとりいるだけだ。事態は単純だ。わたしがその事態を進んで複雑に考えている。疲れている証拠だ。もう眠りたい。まだ眠れない。ずっと眠つていない。

女

「性病」

頬から話を聞いてくれと男は言う。身の危険を感じているならドア越しでもいい

いからと男は言う。信じられない話だけれど確かめてみてくれと男は言う。

(君は性病を持っている。)

(その性病にかかったひとは一睡もできなくなる。)

(君も眠れない。俺も眠れない。俺の妻も、俺とヤッた日から眠れなくなつた。)

(眠れない俺と妻とのあいだで、娘がすやすや眠つてているだけだ。)

(君から性病をうつされたことは、妻には内緒にしている。)

(こんなことがばれたら、怒鳴り込むどころか、今度こそ君は妻に殺されてしまうだろう。)

(ピルを飲んでるからといって、君は馬鹿な男にゴムをつけさせない。)

(馬鹿な男はいっぱいいる。眠れなくなつた男もいっぱいいるはずだ。)

(頼むから、今日から誰とも交わるんじゃない。)

(すぐに病院に行つて精密検査をしてもらえ。)

(大変なことになる前に。これ以上、事態が取り返しつかなくなる方向へ進む前に。)

言いたいことを言い散らかして、男は去る。わたしは電話を掛ける。今日の夜に、一夜を共にすることにして、新しい男に。

女

「手当たり次第」

女

それからわたしは手当たり次第に男と寝た。本当に手当たり次第、それこそ電話帳のあ行から順に男に連絡していくので、最初の週に夜を共にしたのは相田と浅川と飯塚と江口と遠藤と大野だった。日曜の夜だけ一人で過ごした。欠かさず毎週六人の男と寝ていった。渡辺と寝て、電話帳の底まで連絡し終えた次の日には、乱交パーティーに出かけて、手当たり次第に連絡先を交換して、特に積極的な男から誘われた乱交パーティーにまた出かけて、また手当たり次第に連絡先を交換していく。そしてある程度揃つてきたら、これまでどおりあ行から順に男を誘つて寝ていった。有野と石井と井上と上杉と太田と岡本と…。渡部と寝たらまた手当たり次第に人脈を広げた。この繰り返し。家は引き払つたから怒鳴り込まれる心配はもうない。毎晩違う男の家に転がり込んだ。日曜日だけ、ネットカフェで過ごした。これまでの男の写真を整理しながら、任意の男の眠れない生活を夢想した。忙しい忙しいと口を開くたびに言い募っていたあの男は、眠れない時間を仕事にあてて、充実した日々を送っているだろうか。昼寝が唯一の楽しみだとこぼしていたあの男は、違う楽しみをみつけられただろうか。妻とはセックスレス気味だとにやけながらわたしにいたあの男は、いつになつたらこの性病をそれほど愛していない妻にうつしてくれるだろうか。忘れたころにイタズラ電話をかけてみるのも愉快だった。声

を変える機械を買って、どんなひとでも眠れる薬があるんだとか、眠れなくなつたのは数年前のあの事件の祟りなんだとか、眠れなくなる奇病が流行しているのでお氣を付けてくださいとか、あることないこと吹聴して、不安を煽るだけ煽つて、一方的に電話を切つた。生活には潤いが戻つてきた。明日を迎えるのが待ち遠しかつた。こんなに心から楽しいと思える日々は生まれてはじめてだつた。他人の不幸は蜜の味というのは真実だつた。

8 「夢」

不眠症にかかる寸前、毎日の夢に必ず男が登場した。その男とわたしはお互いの体をなめあつてゐる。ある部分をなめるときの男はあえぐ。そこがその男にとっての性感帯なのだ。全身をなめ終わつた後、わたしはカバンのチャックを開く。そこにはじやらじやらと大量の針が入つてゐる。それをその男の性感帯にいっぽんいっぽん刺していく。やがてその男の全身は針で覆われる。血は一滴も出ない。どこからどうみても巨大な剣山にしかみえない。わたしは任意の針をくつくつと曲げる。あつあつとその男はうめき声をあげる。くつくつく。あつあつあつ。楽しくなつてきて、手当たり次第に片つ端から針という針をいじくりまわす。その男はやがてこれまで聞いたことのない種類の声を漏らす。その声はわたしの性感帯に触れて、わたしは針を持つたままで悶絶する。これまで聞いたことのない種類の声がだんだんと大きくなつて、遂にわたしの鼓膜が裂ける——ということはいつも目が覚めた。似たような夢を何度もみた。ただ前日と変わつてるのは、夢をみはじめた段階で、すでにその男に何本か針が刺さつてしまつてゐるということだった。その針の本数は増える時もあれば減る時もあつた。一本も刺さつていらない時もあつた。けれど、長い目で見れば、針の本数は地道に増えていくようだつた。ある日の夢で、いきなり目の前に剣山があつた。男の痕跡はどこにもなかつた。針に触れても、どこからも声は聞こえてこなかつた。がむしゃらに触れても、どこからも声は聞こえてこなかつた。自暴自棄になつて、わたしは剣山にダイブした。わたしの声帯から、これまで聞いたことのない種類の声が漏れた。漏れ続けた。止めようとしても止まらなくつて——といつところで目が覚めて、その日からわたしは一睡もできなくなつた。

9 「東雲」

わたしの一連の行いがはじめて他人にばれたのは、つまらないきつかけからだつた。わたしが不眠症にかかるまえに、会社の慰安旅行の幹事を引き受けていて、手配もすべてわたしが担つていたので、いまさら慰安旅行を休むに休めなくなつてしまつた。

まったくの。いや、本当にそう思えば休めただろう。やっぱりわたしは調子に乗つて油断していたのだ。就寝時間になつても全く眠れない。一人部屋ならよかつたのに、安さを優先したものだから二人部屋、隣には同僚の東雲がいる。好き勝手に暇をつぶしたくて、わたしは気配を消して立ち上がつた。気配を消したはずのわたしに、東雲が間髪入れずに話しかけて来た。

(「どこにいくの?こんな時間に。そんなに気配を殺さなくたつていいでしょ?それともなに?あたしに知られたくないことでもあるの?あるか。あるよね。人間誰だって秘密のひとつやふたつ、小さいのも含めれば千や二千は持つてゐるもんね。でもさ、秘密ってずっと抱えているところらしいでしょ。体内で腐つて、時がたてばたつほどずしんと重くなつてゆくんだから。ねえ、もしもその大事な秘密が、墓場にまで持つていこうとしているあなたにとつて大事な秘密があたしも共有できるものだとしたらどうする?相談相手はいるに越したことはないって、そう思わない?待つて、なにも逃げることないじゃない、ねえ、あなたにとつて致命的な話をしているわけじゃないの、むしろあたしはあなたを救おうとしているの。ねえ、あなたもあるのパーティーにいたんでしょ?あのパーティーにあたしもいたの。気づかないよね。あたりまえだよ、本当にたくさんひとでごつた返していともんね。あたしさ、電車とかで同僚と偶然会つても、話しかけずに移動して車両変えちゃうタイプなんだ。だからあのときも話しかけなかつた。暗くて顔がよくみえなかつたから、勘違いつてこともありうるしね。それに彼氏といつしょに乱交。パーティーに出かけてるなんて、悪い噂を流されるのも嫌だしさ。でもね、事態は変わつたんだ。あの日から、あたしも彼氏も、全く眠れなくなつちやつた。連絡先を交換したひとに連絡をとつてみたけど、そのひとも眠れないみたい。ええ?あたしは眠れる?つまらない嘘はよそうよ。隠さなくたつていでしょ?泊まり込みで残業の日に、一睡もせずに仕事をし続けていたじゃない?一日だけならともかく、何日も何日も。ねえ、隠し事はよそうよ。え、違う違う、もし、あの日から眠れなくなつたつて認めてくれるんなら、仲間になつてくれないかなつてそういう話。何の仲間つて、犯人を突き止めるグループだよ。いま、眠れなくなつた何人かと常に連絡を取り合つて、原因を探つてるんだ。おそらく薬か何かのせいだと思うんだけど。…え?もしかしてあなたが原因なの?…待つて待つて!聞かせてよ。どんな長い話でもいいから聞かせてよ。夜はまだまだ長いんだから。誤解しないで。あなたを捕まえようとなんてしてない。むしろ逆だよ、ああ、あなたが、あたしたちの探し求めていた救世主だつたんだ。)

て、すべての準備を整えてからわたしと出会ったみたいだった。まず東雲はすでに見つけていた十数人の仲間と、一晩のうちに連絡を取った。思ったよりも出会うのが早かつたけれど、どうやら大丈夫みたい、と東雲は言つた。旅行から帰ったその日のうちに、わたしのもとに知らないアドレスから一通のメールが届いた。それはいまいる場所から一時間とかからずに行ける場所への地図だった。地図に示された

こぎれいなマンションに恐る恐る入る。指定された部屋の扉をノックすると、知らない男がわたしを招き入れた。顔はいい。そして彼は扉の鍵を閉めると、すぐに脱ぎはじめた。わたしの服もあつという間に脱がされ、瞬く間に彼の真下でわたしは寝かされていた。不思議と嫌じやなかつた。いや、不思議でもなんでもない、とにかく顔が抜群にいいのだ。今後、稀にする自慰行為で思い浮かべるとなつたら、迷うことなくこの男の顔だろう、とうくらいて、完璧にわたしのツボを押さえた顔だつた。いつもなら言葉を尽くして、相手の男にゴムをつけさせないようにするのだけれど、この男は最初からつけようともしなかつた。そんなことが毎日続いた。決まった時間にメールが来て、毎日知らない場所に赴いて、ゴムをつけようとしたい知らない男と寝た。しばらくして、わたしの口座には決して少なくない額のお金が振り込まれた。全く働かなくても、一応は暮らしていくる、という程度の額だ。わたくしから東雲に電話を掛けたのは、これが最初。

「もしもし、東雲? こういうことをずっと続けるつもりなら、わたし、仕事やめてもいいかな。」

(いいよ。むしろこっちもそれを望んでいたんだ。じゃあ提案だけど、一日で寝る男の数、多くしてもいい?)

「いいけど、それはわたしの質問に答えてから。一つ目、こんなに男たちを眠れなくして、東雲はどうするつもりなの? 一つ目、わたし以外の女でも男でもいいけど、そのひとたちにやつてもらえ、わたしである必要はないんじゃないの?」

(一つ目の答えはまだいえないけど、近いうちに自然とわかると思うよ。二つ目の答えはね、実は複数の男女に同じことをやらせてはみてるんだけど、あなたぐらい感染率の高いひとはいないんだ。あなたはきっと、病原菌そのものか、もしくはそれにかなり近い所にいる。だからあなたを裏切ったり、手放したりすることはないと。それに、同僚だしね。セクハラする上司の愚痴を散々言い合ってきた仲でしょ? 今更知らないひとといつしょにやつていこうなんて思わないよ。安心して。じゃあね。)

それから一週間とたないうちに、わたしは状況を飲み込む。朝のトップニュースは、急速に信者の数を増やしつつある新興宗教が、社会問題化していることを伝えていた。いくら調べてもこれといって違法性はないので、警察も業を煮やしていふということだった。その新興宗教の信者には全く眠らないという特徴があり、教団に入つて生活が破綻するどころか、むしろ仕事量が以前よりも増したり、余った時間を今まで取れなかつた長めの休暇にあてたり、メリットはあつてもデメリットはほとんどないというのだ。システムはかなり緻密に設計されていて、捜査に力を入れても教祖の居場所は杳として知れないらしい。わたしは東雲を尊敬した。こんな短期間のうちに、よくもまあこれだけのことを仕掛けられたものだ。それとも前々から、入念に準備していたのだろうか？

12

「不満」

しばらくは何の不満もない日々が続いた。平穀が崩れたのは一年以上経つてからのことだ。わたしが東雲に久しぶりに電話を掛けたその日、わたしはすでに十数人の男と寝ていた。うまく頭が回らなくて、正確に数を数えることも出来なかつた。一日で二人、三人と寝るぶんにはよかつたけれど、このごろ急速に教団が成長して、どんどん寝る男の数が増えていったのだ。別にわたしは決してSEXが嫌いなほうではなかつたけれど、最早そういう問題ではない。思えばわたしは、かなり苛々して東雲にあたつたかもしれない。「わたしを超人か何かだと思ってるの？こんなのが苦痛で仕方がないよ。…あのねえ、報酬に文句をつけてるわけじゃないでしょ。わたしはもっと穏やかな日々を送りたいの。…本当になんとかしてくれるの？本当に？…ねえ、本当に？」唐突に東雲との電話は切れた。いや、彼女は本当に東雲だろうか？旅行でいっしょの部屋だった時から、そういうふうに一度も実際の東雲を目にしていない。声なんてどうにでも加工できる時代だ。わたしが信頼を寄せていた東雲は、とうの昔にどこかに姿を消しておいたつておかしくない。そんなわたしの不安にそそのかされた推論を、裏付けるような出来事が起こる。知らない男と飲んだお酒の中に、薬が含まれていたのだ。確証はないけれど、入つていたとしたらあのタイミングしかない。何の薬かは一目瞭然だった。男と交わらずにしばらく時間が経つと、つま先の方から徐々にかゆみがせりあがってきて、そのむずむずするかゆみは全身を覆つて、それでも放置しておくと、そのかゆみは激しい痛みへと切り替わる。電話で文句をつけたその日と比べて、単純計算でも倍の数の男と寝ただろうか。もう上司の愚痴を言い合つた東雲は存在しないのだ。交わりながらわたしは根拠もないのにそう悟つていた。百人以上の男と交わつただろうか、視界が断片的に遮られ始めていた、休憩もほとんど取らずに交わり続けていたわたしは、生まれてはじ

めて布団の上で氣絶した。

13

「砂と雨と針」

女

久しぶりにあの夢を見る。いや、あの夢じやない、質感は似てるけど情景は違う、これはあの夢の続きただ。辺り一面を砂が覆っている。誰かに説明されなくともわかる、この砂は男たちの残骸だ。針を刺されるだけ刺された男たちのなれの果てがこの砂なのだ。ぱつぱつと雨が降りはじめて、聞き逃しそうなほどにかすかな声であつあつあつ、と地中から声がする。誰かが地中に埋まっているのだろうか？それとも男たちの想いが砂に凝縮されていて、雨に反応して砂が鳴っているのだろうか？やがて雨は土砂降りに変わる。耳を聾するほどの、あつあつあつあつあつ、という声が辺り一面に響き渡る。痛い。痛すぎる。我が身を貰きそうなほどの激しい雨だ。違う。実際に我が身は貰かれている。これは激しい雨ではない。透明な針だ。千本もの、千万本もの、千億本もの透明な針が、空から容赦なく降り注いでいる。空が歪むたびにわたしの性感帯は耐えられないほどの刺激を受けて、たまらず声を漏らしてしまう。あつあつ。あつ。あつあつあつ。違う。空が歪んでいるだけじゃない。わたしに食い込んでいる、あつ、透明な針がすべて、あつあつ、肉眼で確認できないほどの非常に、あつ、遅い速度で、あつ、あつ、あつ、曲がっていく、あつ、すべての針が、あつあつ、曲がってしまえばきっと、あつあつあつ、わたしは死んでしまうけれど、あつ、わたしは、あつ、どこかで、あつあつあつ、それでいいと思っている、あつあつ、それを昔から望んで、あつ、いたはずだろう、あつ、本能で、望んで、あつ、いた、あつあつ、はずだ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、……。

女

目を覚ました記憶はない。いつのまにかわたしは知らない男と交わっている。悲しくないのに、顔が涙で濡れている。これはあの夢の続きだろうか？それとも先ほどの透明な針は、夢ではないのか…。

14

「わたしたちが一斉に覚醒する日」

女

わたしたちはどうやら隔離されてしまったらしい。

交わることで感染すると日本中に知れ渡つてから、厚い厚い壁がこの街を覆つて、眠れなくなつたわたしたちは壁の中に無理矢理押し込められて、ここから一歩も出られなくなつてしまつたそつだ。

けれど、それでいい。

こうなることをずっと前から望んでいた。

わたしたちが一斉に覚醒する日へ向かって、地道な努力を休みなく続けていた。夢が叶ったのだ。

東雲は絶え間なく新しい男たちを提供してくれる。わざわざ壁を乗り越えてまで、壁の中に入つてくる男たちが後をたたないらしい。聞くところによると、教団は成長期を終えて安定期に入ったようだけれど、特に興味はない。欲望が満たされればそれでいい。こんな未来が予想できただろうか、四六時中、いや、四六時中どころじゃない、体力の限界まで交わり続けることができるのだ。もう睡魔という障害はない。気絶してしまってまで、わたしの意識は冴えたままで保たれている。そしていまのわたしは、体力には絶対の自信がある。受けとめよう。

あなたたちの愛を、休みなく受けとめよう。あなたの愛が果てたなら、次のあなたの愛を。次のあなたの愛も果てたら、その次のあなたの愛を。わたしは死ぬまで永遠の愛を受けとめ続けるだろう。

思えば睡眠なんて馬鹿な慣習だった。毎日のようにこの愛おしい世界から意識を遠のかせなければならないなんて、考えるだけで虫唾が走る。

男たちよ、わたしに、群がれ。わたしは永遠にあなたたちの愛を貪り食つたとしてても、永遠に飽きない自信がある。安心して、群がりなさい。

二幕

1 「世界」

東雲

わたしはこの世界を揺さぶりたかった。

その衝動がいつわたしの体内に巣食いはじめたのかの記憶はない。気が付いたらその衝動はそこにあった。わたしの背中をぐいぐいと強引に押しっていた。わたしは生まれた時からこの世界の節理がうまく呑み込めなくて、もちろんいまでも呑み込めない。子供のころ、世界の節理に対する質問を大人たちによく浴びせたものだったけれど、そういうときの大人们的返答は決まって、大人になればきっとわかるよ、

という極めてずさんなものだった。子供の権利はあまりにも守られないから、子供というのは弱くて戦えない存在だから、その答えにもなっていない答えを、質問のたびに黙つて受け入れるしかなかつたけれど、いまなら真っ向から反論できる。それは真つ赤な嘘だと。その証拠に大人になってから、世界に対する懷疑はむしろ増えている。増殖している。繁殖しているといつてもいい。

わたしはこの世界を揺さぶりたかった。

少しでもわかりやすい世界に作り替えたかった。

2 「計画」

東雲

彼氏と乱交パーティーにいってからというもの、彼氏もわたしも眠れなくなつた。少し調べただけで、わたしたちと同じ症状を訴える者が他にもいることがわかつた。これは転機かもしけないと思った。格好の材料だった。世界を作り替える計画を、絵空事ではなく、実行に移せるほど緻密に立てる。眠れないということ、それは人が一生で使える手持ちの時間が膨れ上がるということ。わたしは仕事を終えて、眠れない長い長い時間を、計画の細部を詰める時間にあてた。眠れない人を増やす、増殖させる、いや、繁殖させるための効率的な手段は、いったいぜんたいどういうものかということを、あらゆる角度から検討した。幸い、眠ないと訴える人といふのは、わたしたちがはじめての事例じゃない、ごくまれに誕生してしまふのだそうだ。なかには気が狂う人もいるにはいるが、正常な思考回路のまま、正常な人生を終える人もいるのだ。わたしは気づいた。他の人と似た人生を送るもの、ただ一点眠れないだけというのは、もしかすると、人生にとって、有益なことなのではないか、と。

3 「連絡」

男

東雲から連絡があつた。東雲っていうのは俺が一瞬付き合つて一瞬で別れた女で、顔がタイプだつただけっていうサイマーーな理由で、とりあえず一回ヤリてえつてだけで近寄ったんだけど、まあ簡単にヤラせてくれてよかつたんだけど、それからやたらとうるせえし、しつこいし、もうなんというかルックスのメリットを性格のデメリットがはるかに超えてるって感じで、これはたえらんねーわつていう当然な理由ですぐ別れ告げて、向こうも向こうで離れたら意外と?未練ないかんじで、それ以来スッと連絡が途絶えて、あーよかつたって思つてたんだけど。なのにいまさら。迷惑なんだけど。って最初は思つたよ?でもさ、結果的に俺は東雲の話にのめりこんじゃつたんだよね。東雲とあれから一度も会つていなかつづけのにさ、東雲は俺

が不眠症で悩んでることとか、まして、悩み始めた日までばっかり言い当てたんだよね。おいおい超能力かと。もちろんいまどき？俺のパソコンハッキングしたり、腕のいい探偵雇つたりしたらさ、簡単にわかる情報かもしれないよ？でもさ、メリットがないでしょメリットが。貯金が十万下回ってる、すぐバイトやめるフリーター騙してもさ。まだから信じたよね。東雲も俺と同じ症状で悩んでるって話は。で、話の肝はこつからなんだけど、もしかしたら感染症かもしれないつづーんんだよね。俺は震えたよ。つづーのはさ、俺のできたばかりの彼女、マツルっていうんだけど、一週間前から俺と同じ症状で悩み始めたつてこぼしててさ。ぞつとしたよ。一週間前つづーのははじめてヤッた日だよ、マツルと。

4 「說得」

東雲

ね？でしょ？その可能性高いでしょ？そう思わない？思うよね？やつぱりこれは異常事態なんだよ。いまはこんなに小規模な事件におさまってるけど、これはいつれきつと街を、国を、いや？きつと世界を、揺るがすほどの大々的な事件に繋がっていくことなんだよ。もはや歴史と呼んだっていいと思うね。人類の大きな分岐点のひとつになるんだよ。そのことにわたしたちは早い段階から気づけたんだよ。…え？気づいたからなんだって？立ち上がりなきや、でしょ？…めんどくさいのはやだって、あのねえ、なにもツタヤのDVDの返却を頼んでるとか、ペットを預かってくれってお願ひしてるとか、そんなみみっちい話じやないんだよ。むしろ義務？義務つていつたつて過言じやないと思うんだよね。退屈な日常に一石を投じるまたとないチャンス…あれ？もしもし？もしもーし。切りやがった。くっそ。

東雲

わたしはありとあらゆる知り合いに連絡を取った。もちろん大半は信じないひととか、信じてもいっしょに行動したくはないひととか、信じたからこそわたしがやろうとしていることを止めようとするひととかだったけど、やっぱり稀に、全力で応援してくれるひとが現れる。木田は「マジでやべえ、歴史に立ち会える瞬間なんて人生で一度でもめぐつてくるかどうかも怪しいような奇跡だからめっちゃ興奮するわ」っていつもの大きさに物事を受け止めるバカ丸出しの感じで逆にこっちが戸惑つたし、増川は「確認しておきたいんだけど、僕、犯罪に少しでも関わるのはごめんこうむるからね？あくまでもこの異常事態を解決するために必要なことは、なるべく協力したいっていうだけなんだからね？飛び火は絶対に避けたいからね？そこだけは忘れないでね？」なんて応援してるんだか離れようとしてるんだかよくわからない警戒心ありありの返答だったのに基本的にわたしの試みを支えようとする姿勢は崩そうとしなかつたし、井口は「あのさ、ぜんぜん話わかんなかったんだけどさ、なんか、すごい？情熱？は？なんとなく伝わってきたしさ、しのの

めちゃんがこんなに物事に必死に？なることってあんまりなかつたから感動して
るっていうか、たぶん、どうやつて協力すればいいのかよくわかつてないんだけ
どさ、できることなら、できることは仕事もあるから少ないかもしけないけどさ、
できることなら、うん、協力？するからさ。」 っていう相当回りくどい割には意味
のないだらだらとした返答だったけどまあなんとか、わたしの情熱に感化されてくれ
たし、幸先はいい。もちろん断るひとのほうが圧倒的に多いけど、大事なのは質
よりも数なんだ。頭のいい人がぼそぼそと正論をつぶやくよりも、バカ百人が怒鳴
ったほうが力を持つんだ。もちろん、そういうごり押しの方法を嫌う人は一定数い
るだろうけれど、そうでもないとせつかついた火も簡単に消えてしまうだろう。
そういう意味では、わたしは無差別の放火魔だろう。人の心にどういう方法でもい
いから、とにかく火をつけるのだ。

5 「転機」

東雲

転機は望んでもやつてこないというのに、来るときは意外と簡単に向こうからや
つてくる。わたしが不眠症にかかるまえに、会社の慰安旅行の幹事を引き受けてい
て、といつてもわたしの仕事があまりにも多すぎるので、みるにみかねてほとんど
の業務を同僚がやってくれただけで、さすがに幹事が休むわけにもいかないから、
渋々行きたくもない旅行についていつたんだ。もちろん、就寝時間になつても全く
眠れない。隣には同僚がすやすやと眠つて……いない。眠そうですらない。ぱつちり
と目を開けている。眠気のねの字もなさそうな気配にわたしはぎよつとした。そし
て記憶の点と点が急速に繋がつてゆく。わたしのなかのあらゆる記憶が、彼女も全
く眠つていなことを示している。こんなに身近にいたというのに気付かなかつた。
思わぬところで仲間と巡り合えたものだ。迷う余地はない。わたしは話しかけた。

6 「原因」

東雲

いま、眠れなくなつた何人かと常に連絡を取り合つて、原因を探つてるんだ。お
そらく薬か何かのせいだと思うんだけど。

女

違うよ。それは薬のせいじゃないよ。いつたいぜんたいどこをどう調べたら薬な
んて結論にたどりつくの？見当違いもいいところだよ。これはね、性病なんだ。

東雲

あ、ちなみにこれはわざとだからね。わざとわかつてないふりをしてカマをかけ
てみたんだ。

女

人と人とが交わらないと感染しない、そういう病気なんだ。そういうわれたら納得するでしょ？あなたも感染しているってことは、きっと心当たりがあるはずだよ。心当たりはない？誰かとゴムもつけずに愚かな行為をしたんじゃないの？これはその代償だよ。結局は自業自得なんだ、どんなに巧妙な言い訳を吐いたとしてもね。街中でいきなり暴漢に襲われたっていうなら話は別だけど。

東雲

え？もしかしてあなたが原因なの？

女
原因？よしてよ、わたしが原因なんて。ちょっと詳しいだけだよ、そんなはずないでしょ。原因なんて誰にもわからないよ。たとえ人類の英知が結集したとしても、これからも誰にも解明することはできない、根拠もないのにそんな気がするんだ。わたしは一年以上も前からこの病に悩まされているから、あなたよりも感染が早かつたから詳しいだけで、大きな差はないよ。

東雲

一年以上前…？これは大物をひきあてたかもしれない。

女
わたしもあなたもやがて越えられない壁に衝突する。この病にかかった人は不安で不安で仕方がないからあらゆる手段を駆使して情報をかき集めるだろうけど、みんな同じ壁にぶつかってそれ以上一步も進めなくなるに決まってる。これ以上話しても仕方がないよ、わたしが持つてる情報はこれだけしかないんだから。…なんの、その積極的な態度は？気持ち悪いんだけど。わたしを然るべき機関にでも突き出すつもり？

東雲

待つて待つて一聞かせてよ。どんな長い話でもいいから聞かせてよ。夜はまだまだ長いんだから。誤解しないで。あなたを捕まえようとなんてしてない。むしろ逆だよ、ああ、あなたが、あたしたちの探し求めていた救世主だったんだ。

救世主？だから何度も言つたようにわたしはあなたと同じ立場だつて。

東雲

感染が一年以上も前つていうのは本当？

女
嘘をついてなんになるっていうの？

東雲

ああ、なんてこと…これまで数百人の感染者に出会つたけど、みんなこの半年以内に感染してる。一年以上も前から感染してたのはあなたがはじめてだよ。（と、女の手をぎゅっと握る）ちょっと、逃げないでよ。話はまだまだこれからでしょ？

7 「表情」

東雲

同僚はこれまでみせたことのない表情をみせる。どう形容すればいいのだろうか、わたしもこれまでみたことのない表情だったからとっさに適切な語彙が思い浮かばないけれど、強いていうなら、驚きと諦めがないまぜになつたような、巨大すぎると運命を受け止めながらも取り落とすような、矛盾していることがわかりきつて、るのにむしろ衝突を全面に押し出すような、ああなんていえばいいんだろう！百聞は一見に如かず、みてもうつたほうが絶対に早いのに、わたしはその表情をみせてあげることができない。歯医者でよくみる、歯の型を取るためのすぐ固まるピンクの液体を、パイ投げよろしく同僚の顔面にぶつければよかつたのに、そこまでの機転はきかなかつた。いや、万が一顔の型が取れたとしても、それはあくまで型であつて、あのなんともいえない気味の悪さを備えた表情では決してないだろう。わたしはあの表情をみたとき、雷にうたれたかと錯覚したぐらいなのだ。歴史的瞬間に立ち会つた喜びに、全身がくまなく痺れていたのだ。

8 「仲間」

東雲

わたしはこの日のために仲間を集めていたんだと悟る。すべては神のお導きだつた。わたしはすぐに仲間という仲間に連絡を取り、眠れなくなる体を希望する男と、いう男をかき集め、同僚と交わる場を頻繁に設けた。みるみるうちに眠れない男は数を増やし、これだけいれば同僚に頼らずとも感染者を無尽蔵に増やすことができ、そう思い込んでいたけれど、ここで予想外のアクシデントに見舞われた。男たちの感染率が異様に低いのだ。感染しないわけではないが、どのような工夫を試みても、量産するには程遠い状況だった。大の男十人が一ヶ月必死に腰を振るよりも、同僚に一日に十人の男をあてがつたほうがよほど効率的だというぐらいだ。わたしは、わたしは、わたしは、焦つた。冷や汗がぶわっと分泌されて床にしたたり落ちた。これでは綿密に積み上げた計画が音を立てて崩れ落ちてしまう。少なくとも半年で千人の感染者を作り出さなくては、そもそも実行不可能な計画なのだ。わたしは決断を迫られていた。同僚を廃人同前まで追い詰めるのかどうか。…うん。…追い詰めよう。

9 「廃人」

すべての俳優がこのシーンに参加する。俳優の声のほかに、録音した多くのひとの声が俳優の声の上に重なる。不協和音を維持することが望ましい。これから語られるの

は無意識の総意なので、意識的に、自分の言葉として語る必要はない。ぼんやりとした、誰かに言わされているという体を保つてよい。

わたしたちは廃人が見たい。どんななかたちでも構わない、なんらかのかたちで歪んでいるひとびとがみたい。この窮屈な価値観や日常を打ち壊す、逸脱したひとびとがみたい。けれど、そのようなひとびとにわたしたちがなるのはまっぴらごめんだ。わたしたちがなりたいのはあくまでも傍観者だ。熱狂はするが、わたしたちの生活を脅かしてほしくはない、わたしたちはただの無責任な野次馬だ。スポーツ観戦と同じようなりかたで、壊れていくありさまを観察してみたいだけなんだ。それぐらいしないとわたしたちの鬱憤は晴らすことができない。毎日毎日地道に、溶けない雪のように降り積もって、わたしたちの本音を凍えさせてゆくこの大量の鬱憤からは逃れることができない。いや、どのような方法をとったとしても結局は逃れることができない。わたしたちは一瞬のやすらぎを求めているだけだ。解決されなくともいいのだ。根本的な問題がそのまま放置されてもいいのだ。それはあまりにも大きすぎて手におえないから、よく知らない偉いひとたちが、いつのまにかどこからかあらわれて、何の得もないにも関わらず全力を尽くして、わたしたちに縁のない素晴らしい賞をもらつて、歴史に名を残せばいいのだ。そんなことはどうでもいい。本当に心からどうでもいい。わたしたちは心を入れ替えても名を残せないのだから、せめて定期的に廃人を観察して自分はまだましだとほつとするような娯楽が定期的に供給されてもいいと思う。そのような願望を糾弾されたとしてもそれはお門違いだ。わたしたちの責任はつゆほどもない。悪いのは先祖だ。悪いのはこのような願望を抱かざるを得ない社会のありがただ。いまさらどうしようもない。廃人はどうしても生まれざるを得ないのだから、せめて道化の殻をかぶついてほしい。面白くあってほしい。つまらない今まで死ぬのはやめてほしい。何の意味もない。何の貢献もない。何の悦楽もない。そんなゴミは処分すること自体が手間でしかない。無責任な娯楽を求めているわたしたちに手間はかけさせるな。腹だしい。

10 「面倒」

男

ある日のニュースで報じられていたのは、最近急に名前を聞くようになった宗教法人が違法な薬を使用していたとして警察が一斉逮捕に踏み切ったということだった。俺は起きたばかりで油断していたから、その宗教法人を率いていた張本人として東雲の顔がアップで映されたのを見て、思わず朝飯を吹き出してしまった。なんというか、目つきが前よりも格段に攻撃的になつて、頬がげつそりとこけ、風貌が悪い方向へと変わってしまったが、間違いなく東雲だ。俺はなぜか安堵していた。俺が東雲の誘いに乗らなかつたのは、そういった犯罪まがいのことには加担

しないという断固とした態度があつたわけではなく、この病気なのかどうなのかもよくわからない、ただただ毎日眠れないという症状をそこまで大げさに捉えることにドン引きしたわけでもなく、単純に面倒だっただけだ。新しいことに首を突つ込むことが、守るほどでもないそれほど楽しくもない日常を、もしかしたら更に悪化させてしまうかもしれない可能性に怯えてためらつただけだ。俺の胸の内にくすぶるどんよりとした面倒くさいと思つてしまふ心根が、俺を助けてくれた。学校で積極的に発言する生徒はやたらと先生に褒められていたが、ああいうやつらが積極的に大規模な犯罪に加担してしまふのだと思う。これはただの偏見だが、ある程度あつていいとも思う。俺みたいなめんどくさがりやはせいぜい、万引きとか小ぢんまりとした犯罪に手を出したり出さなかつたりするだけだ。社会が転覆するようなことを考えるのは、何回生まれ変わつたとしても、天地がひっくり返つたとしてもありえないことだ。宗教法人にかかわっているひとたちは、といつてもカメラに映つた信者しか俺は目にしていないから本当は俺みたいなやつも奥に控えているかもしれないが、パツと見では全員が全員、気味が悪いぐらいにいきいきとしていた。いきいきとしてはいけないのだ。まったく、いきいきとしてはいけないと叱る大人が少なすぎる。夭寿をまつとうするためには、ぐつたりとして毎日をやり過ごさなければならぬ。楽しくはないかもしないが、楽しさに身をささげれば、遅かれ早かれ身を滅ぼすだろう。ぐつたり。これが現実をサバイブしていくうえでのキーワードだ。そうだ、俺がその大人になろう、いきいきするなどためらいなく叱れる大人になろう。公園で遊ぶ子供たちに「楽しいか？本当に楽しいか？」と意味ありげに問いかげよう。そうだ、そうしよう。ぐつたりさせよう。未来に生きる子供たちを。

11 「質問」

子供たちの声、男以外の役者たちで喋つてもよいし、録音でもよい。

- 男 子供たちの声
 そうやつて、いきいきと遊べるのもいまのうちだよ。
 え、どうして?
男 子供たちの声
 ニュースはみているか？君たちのみでいる世界は、いつ失われるのかわか
 らないんだ。いま消えたとしても決しておかしくはないんだ。
 目の前のものはなくなつても、世界がなくなるわけじゃないんでしょ。
男 子供たちの声
 そうだけど、え、目の前の、この風景に、こだわりはないのか？
男 子供たちの声
 ないよ。
男 子供たちの声
 おもちゃが壊れても、別のおもちゃで遊べばいいんだから。

男

子供たちの声

男
子供たちの声
ないよ。

男
子供たちの声
ないのか。

男
子供たちの声

男
子供たちの声
愛着なんて、持っていないほうが自由に生きられるんだよ。
おじさんはなにかに愛着があるから、そんな質問をするの？

男
子供たちの声
どうかな。そうやって、真正面から尋ねられると、自信をなくしてしまって

男
子供たちの声
な。

男
子供たちの声
なあんだ。

男
子供たちの声
いわれてみると、意外と悔いはないかもしない。

男
子供たちの声
おじさん、ちゃんと、自分の立場が固まってから質問してくれない？

男
子供たちの声
ごめんな。

12 「風景」

愛着のある風景はあるだろうか？胸の奥で、目覚めるのを待ち望んでいる風景は？そういう風景がひとつもない生活は寂しい。原風景とはいわないまでも、思い出すと少し落ち着く風景に、ずっと見守られて生きていきたい。そう望むのはわがままだろうか？わがままじゃないと信じたい。だってささやかな願いじゃないか。生活が追い詰められたとしても、経済的に余裕がなくなつたとしても、風景だけは裏切らないはずだ。風景は変わらない。変わることもあるけど、変わつてほしくはない。ずっと変わってほしくない風景には、きっと愛着が芽生えているのだろう。

男

眠れなくなつてから、俺は毎晩、近くの公園で夜を過ごしている。遊ばれない遊具、人目を忍んで森に入るカッフル、ベンチで寒そうに寝転がっているホームレス、日ごとに若干の変化はあるけれど、基本的には変わらないこの風景の中に朝までいると、まるで眠っているように思える。そう、俺の生活は何も変わっていないのだ。別に公園でぼーっとしていることは苦痛じゃない。ベッドの上で眠ることと、いつたい何が違うのか、うまく説明することができない。むしろ、安らげる時間が増えたぐらいだ。俺を包んでくれるこの場所が、毎晩変わらずここにあるということ。

13 「問題」

あなたたちは本当に眠らない体を手に入れたいと、心から願いますか？眠れない日だって、長く長く生きているんですもの、もちろんあるでしょう。なんだつたら、眠れない日の続いたことがあるひどい、少なからずいるかもしれません。でも、眠らない体を手に入れるというのは、そういった、こまゝとした」ととは別の問

題なんです。眠らないというのは眠れないということです。目の前にある問題から、なんの解決にもならないとしたつて、現実逃避したくて、思わずベッドに飛び込んだ経験はありませんか？布団でもいいんですけど。そこでなんだかよくわからない夢を見て、眠るまえとなにも変わっていないのに、いつのまにか、またがんばろうという気力がわいていた、という経験はありませんか？毎日の安らかな眠りを否定するということ、それはわたしたちに約束されたふたつの世界のうち、ひとつ的世界を否定するということに他ならないのではないでしようか？眠りの世界はわたしたちの世界とは違うルールで動いています。わたしたちの世界のルールに呆れかえったとき、違うルールの世界が待っていることはわたしたちに安らぎをもたらすでしょう。それでも、あなたたちは本当に眠らない体を手に入れたいと、心から願いますか？

14 「情報」

男

気が付くと、俺は彼の話に納得してしまっていた。ぶんぶんとうなずいてしまった。リーダー格の人物が逮捕されても、未だに勢力の衰えないあの宗教法人に業を煮やして、この眠りの大切さを説く宗教法人が新たに立ち上がったのは、きわめて自然な流れだと思えた。ここにはフツーに毎日眠っているひとたちだけじゃなく、俺みたいに感染症にかかるて眠れなくなつたひともいた。もっとも、俺の隣の奴は感染症にかかるて以来ずっと眠りの世界に恋焦がれていると唾を飛ばして切実に訴えかけたが、あまりにも俺と温度差が違ひすぎてちょっと引いてしまった。俺は毎日のように公園でぼーっとすることに満足しているからだ。形は変わっているけれど、それが俺の眠りなのだ。俺の目的は別にある。東雲のことを、ここにいるみんなが勘違いしているように思えるからだ。もちろん、ここにいるみんなは東雲なんてニュースでしか知らないだろうから、ちまたで「ギヨロちゃん」とふざけたあだ名がつくような、ギヨロっとした目とか、そういう、断片的な情報しか知らないんだろうけど、違うんだ、東雲はそんな奴じやないんだ。そんな奴じやなかつたんだ。ここにいるみんなは知らない、誰もがある日唐突に東雲になりうるんだということを。俺はここで演説がしたい、なにも東雲はわるくないなんて馬鹿なことはいわない、東雲は極悪人だ、そうじやない、俺が言いたいのはそんなことじやない、俺たちも極悪人だということを、すぐに理解できるかんじではいえないかもしけないけれどなんとか言葉を尽くして伝えたい、東雲は悪魔につかれていたんだとか、宗教じみたことをいう奴はそいつた使い古された便利な言い回しで片づけるけれど、そういうの、俺は覚えている、東雲が俺に電話をかけてきたときのあの感触を、ひとをだまそうとして躍起になつてるわけじやなくて、もつとこう、やむにやまれぬ衝動が後ろに控えているというか、違う、そうじやない、あの切実さを言い表す言葉

は俺ではない、違う、そうじゃない、そうじゃないんだ！ああ、あのときの音声をどうして録音しておかなかつたんだろう、ここのみんなをそれで震撼させることができたかもしれないというのに、納得してはいけないのだ、腑に落ちていてはいけないので、完全に理解したつもりで終わってはいけない話というのが、この世にはあるのだ。もやもやする真実を、もやもやしたまま受け取る勇気を持たなければならぬ局面があるのだ。

15 「増殖」

男

眠れなくなつてから、俺は毎晩、近くの公園で夜を過ごしている。ゆっくりとこの公園は変化してきている、明らかに俺と同類の男が増殖してきているのだ。なぜか女はいない、男ばかりがぼーっと朝になるまでこの公園の風景を見守るでもなく見守つて、そしてふらつと去っていく。こんなにたくさんの男たちが、眠れない時間を持て余して、この公園をみつけるまで居場所もなかったのだと思うと、少し呆れるけれど、同時にほつとしている俺もいる。もつと早く知りたかった、こんなに近くにたくさんの仲間たちがいるということを。俺は話しかけたい衝動にかられるけれど、ぐつとこらえる。そんな野暮なことをしてはいけないということぐらい、俺にだつてわかる。俺に話しかけようとした奴が、俺のぼーっとする時間をおかさないために、ぐつとこらえてくれたかもしれないのだ。俺はそうして、むずむずをおさえながら、今日もこの公園を見守る。俺は灯台守になつた気分になるが、勘違いをしてはいけない、俺は何も守つてなんていないので。たとえばこの公園が悲惨な襲撃を受けて、植物という植物がずたずたに切り裂かれたとしても、俺は動くことなくその惨状をぼーっと眺めているだろう。

俺はこの公園のどんな姿も受け入れるだろう。それはある意味で残酷なことかもしれないが、俺はそういうことを、幸福の一種だと思つてしまつ。